現代日本のエッセイ

散歩者

永井龍男

永井龍男

現代日本のエッセイ

散歩者

毎日新聞社

現代日本のエッセイ

散歩者

昭和四十八年十二月五日 第一刷
昭和五十一年八月二十日 第二刷

定価 一五〇〇円

著者 永井龍男
編集人 桑原隆次郎
発行人 伊奈一男
発行所 毎日新聞社
〒一〇〇 東京都千代田区一ッ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇 名古屋市中村区堀内町

印刷 図書印刷
製本 佐久間製本
〈検印省略〉

© Tatuo Nagai Printed in Japan 1973

0395-561024-7904

散歩者目次

わが切抜帖より

水晶　二
銭湯　一六
少年　二一
銀座の着物・巴里のベレ　二五
キリンの死　三〇
月を往復する距離　三五
祝儀不祝儀　三九
カンディダの話　四四
ビルとネズミ　四八
耳と鼻と　五三
歯医者の庭　五八
「死ぬほど良心に」　六三
下足札　六六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五右衛門について　七一
フォークと箸と　七五
身辺即事
十月の時計　八三
切るたのしみ　八六
伯父さん　八八
筆不精　九一
天気予報　九三
冷たい手　九六
芥川・直木賞の歳月　九八
小悪魔　一〇一
薔薇のとげ　一〇四
孫と新興国　一〇六
翁　一〇九

にわとりと牛　一三
ねむいということ　一二五
電車の中　一二九
バス代　三二
杉林そのほか　一三五
掘立小屋のこと　一四二
水のあと　一四八
器量　一六六
また、年寄りのこと　一六九
彼岸まで　一七三
淋しくはないか　一七六
引越しの数　一七九
眠られぬ夜　一八三
柊と水仙　一八七

寒燈　一八九
復讐　一九一
夜の食堂車　一九三
豆腐の味　一九五
雨　一九七
西日　二〇〇

応答一束

わが小説　二〇五
短篇小説と貯金　二〇七
錯覚　二一一
ひもの箱　二一三
夫婦の作法　二一六
便利な幸福　二二五
文章にこだわる　二三八

人の印象

止まっている時計　二三七
しっぺ返し　二六四
一冊の本　二六八
中原中也　二七一
堀辰雄　二七四
芥川龍之介　二七七
直木三十五　二八〇
宇野浩二　二八三
菊池寛　二八六
佐佐木茂索さんのこと　二八九
チェホフ叔父さん　三〇五
九蔵の団蔵　三〇九

対談　古いアルバム　三一
著者略年譜　三五

装幀　安彦勝博

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

わが切抜帖より

水　晶

「これは面白いな」

と、思った新聞記事や、たまには雑誌記事を、昔から私は、切り抜いて置く習慣があった。

これは面白いという意味は、はじめは小説になるかも知れぬということが第一だった。

だから、その切抜きは、私には関心があっても、他の人達にとっては一向面白くないものかも知れなかった。

新聞記事を切り抜くのは、私に限らず、いろいろな人のすることで、吹聴するまでもない。昔は「切抜通信」というようなものがあった位で(いまもあるかも知れない)、必要な分野の注文を出すと、たとえば経済とか文芸とか、演芸という風に指定すれば、日本全国の新聞にのった同種類の記事の切抜きを、まとめて送ってよこす商売もあった。

しかし、私の切抜きは、そのうち少しずつ変って行った。私だけの関心を惹いた記事ばかりではなくて、感動した文章や記事にも及んで行った。

他日一冊の本になって、世に出るような筆者のものは、その日の新聞で読み捨てても再読の機会はあるが、もしかすると、それ切りになる文章があるかも知れない。

世の中は忙しくなるばかりだから、新聞記事なぞはなおさらのことである。昨日の大事件すら、一月経てばほとぼりはさめてしまう。市井に起った小事件なぞは、一日か二日で忘れられる道理である。

「こんな見事な、文章があるんですよ」

「面白いと思うんですがね、どうでしょうこの記事は」

そんなつもりで、私はこれから、新しいものや古いものや、短い文章、数行の記事を取り出して、私なりの感想を記して行きたいと思いついた。

切抜きを、人に見せてしまうのは、ずいぶん惜しい気もしないではない。だが、なるほどと同感してもらうことが出来れば、それも一つ大きな悦びである。

それに、仕事に追われたりすると、折角保存して置いた新聞や切抜きを、見えなくしてしまう失敗も度度ある。こんな形で活字にしておけば、私の習慣ももう少し身につくようになるかと思う。

前置きは、短い方がよい。

とにかく第一回に入る。

数年前、秋から冬までをニューヨークで送ったことがある。

前から「クリスマスは私の家で」と、マサチューセッツ州のM家から招ばれていたので、十二月二十四日の朝、ニューヨークをたった。汽車がマサチューセッツにはいると、あたりの森の木々のあいだには数日前の雪が残っていて、どこの一角をとってみても「泰西名画」といいたい風景。

目的のガードナー市の駅には、M老夫妻が冷たい午後の風のなかを待っていてくれた。夫人の買物のの

こりがあるというので、二三軒のお店により、それから、三十分ほど森をぬってドライブして、いよいよ、彼らの住むカエデとニレの木におおわれたいなか町につく。秋が来た時とうって変って木々は葉をおとし、ある町角には、小屋が出来ていて、その中にキリスト誕生の光景をあらわした人形がかざられてあった。

「ほら、クレーシだ」といって、ミラー氏は、そのまえで車を徐行させて見せてくれた。

どこの家のドアにも、ヒイラギの環がかかり、窓のなかにはクリスマス・ツリーがかざられているのが見える。

さて、M家につくと、さっそく、クリスマスの支度の手つだいにかかった。ツリーは前日、親類の子供達が来てかざってくれた。私の仕事は、階段の手すりを森から切ってきたみどりの枝でくるむことである。ほそいひもで、できるだけ葉っぱが手すりからはえているようなかっこうにつつんだ。これがすむと、M夫人がみんなを呼んで「見てごらんよ。いままでこんなに上手にやった人は、ひとりもなかった」とびっくりする。家のなかには、森のなかを歩いているようなにおいがしはじめた。

七十八と七十四の仲よし夫婦は、ともに仕事をもっていたから、家には家政婦がいて、この人が台所でM夫人の指図によって、M家につたわるプディングなどをつくっていた。

クリスマス・イブには、家の者だけ——M夫妻・家政婦とその息子のジョニー、それに私だけの静かな食事だった。

つぎの朝早く、ミラーおじいちゃんと教会に出かけた。このおまいりは、彼が信心ぶかかったり、私がクリスチャンであったりするためではなく、日本からきた私に、アメリカのいなか町のクリスマス風景

を見物させるためであった。しかし、冷気のなかにひびきわたる鐘の音であつまり、うたって、いのって、また散ってゆくこの礼拝は、すがすがしいものだった。

帰ると食卓の準備ができていた。M氏のオイ二人とその家族が、つぎつぎに到着して、子供達六人は、すぐ食堂のテーブルで、酒気なしの食事をはじめる。おとな達のために、きょうは、客間にできたテーブルのまわりで、しばらくは、さしつさされつのにぎやかなやりとりがあった。やがて、M氏がテーブルの上座についてごちそうのサラをまわしはじめる。肉は七面鳥ではなく、大きなハムに香料の丁子の棒をさした丸焼きだった。

テーブルのまん中にある、シンチュウでできた天使のついたローソクたてに火がついても、いっこうに天使がまわらない。

ほんとうは天使がまわって、チリンチリン鐘をならすのだと、M氏が説明してくれた。まわり灯籠の要領だなと思ったので、私がちょっと熱い空気のあたるところをひねったら、たちまち天使はまわり、鐘がなりだした。みんながわっと声をあげたのに、M氏は「どうして鐘がならないんだ？」と、きょとんとしている。一座はしんとなり、私はぎょっとした。前年まで聞こえた鐘が、M氏には聞こえなくなっていたのである。

しかし、すぐまた座はにぎやかさをとりもどし、食後は、おとな、子供そろってのゲームがはじまった。若い人達は、老人夫婦を十分たのしませ、おくり物をもらうと、七時すぎにはさっと切りあげていった。

そのあとの静かで、おだやかで、さびしかったこと。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com